

## 第8章 室町期抄物における「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目(ヅカイ)」

—用語の分布と意味—

### 1. はじめに

『玉塵抄』には次のように、「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目(ヅカイ)」<sup>1</sup>といった語句を用いて、漢字の読み方を示しているところがある。

#### ①ヨミクセ・クセ

(1)鳥ノコトニ止ノ字ヲカイタハイルトヨムソ、トトマルトハヨマヌソ、イルモトトマルモ同コトナレドモヨミクセソ、(玉塵抄・10巻 p.694)

#### ②ヨミツケ

(2)<sup>ル</sup>大戴礼 大ハタイトヨマヌソ、<sup>ル</sup>大戴一トダトヨムソ、ヨミツケソ、教ニ大虚空ト云コトアリ、ソレモ<sup>ル</sup>大トヨマヌソ、<sup>ル</sup>大虚一トヨムソ、ソノツレソ、(玉塵抄・2巻 p.534)

#### ③ヲシツケ(ヨミ)

---

1ちなみに、「ヨミクセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目(ヅカイ)」について、『時代別国語大辞典室町時代編』(1985, 三省堂)は、次のように説明している。①「ヨミクセ」：一般には漢字・漢語について、その家・流派などで慣例となっている、独特の読み方をいう。②「ヨミツケ [読付]」：その漢字・漢語について、そう読むことが慣例となっている、特別の読み方。→読み癖③「ヲシツケヨミ [押付点]」：自分勝手な推量・臆断による文字の読み方。④「名目」：それぞれの事物に与えられている決まった呼び名。またある決まった言い回しや読み方などのならわしをもいう。

(3)全ハ教家ニハスンテヨメルソ、全身ハセンヲスムソ、分ノ字モ分身モフンヲスムソ、  
叢林ニハヲシツケヨミニ分身トニコラルルソ、 (玉塵抄・8巻 p.287~288)

④名目(ツカイ)

(4)敗一ハ教家ノ名目ツカイニ不同アリ、敗ヲバイトニコル人アリ、真乗ハスメタソ、  
(玉塵抄・8巻 p.629)

これらは、すべて一つの漢字音をめぐって複数の読み方を示しているものばかりである。そして、その中で必ずしも韻書などのしかるべき根拠を示すことなく、その当時における慣例的な読み方を、「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」などといった語句を用いて示している点において共通している。本章では、このような語句、またこのような語句でもって指定された漢字の読み方を読み癖と呼ぶことにする。そして、「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目(ツカイ)」などの読み癖が、当時どのような漢籍の抄物に用いられていたのか、「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」などの用語がどのような読み方に対して用いられていたのか、またこれらの読み方は当時どこにどのくらい定着していたのかを明らかにしてみたい。そして、あわせて、その過程で読み癖と当時における呉音・漢音との関わりや読書音との関わりなどについても考えてみたい<sup>2</sup>。

## 2. 先行研究

福島(1962)は、「連声と読み癖」で、『毛詩抄』における「比物」の「物」を「フツ」と清んで読むように注記した例を挙げて、「漢籍読み」での読み癖について述べている。

---

<sup>2</sup> 当時における一般的な読み方、また呉音・漢音を判断するための資料としては、『文明本節用集』『倭玉篇』『下学集』『聚分韻略』『邦訳日葡辞書』などを用いる。

比物一物ハ清ソ、コン便カワルイソ、ハタノトキモフツノ音テスムソ、

(毛詩抄古活字版 卷10・15ウ～16オ)

彼は、主として連声を読み癖ととらえているが、当時の読み癖というものの性格については具体的に触れてない。

また、高松(1971)は、「明」も「ベイなれどもメイト読む(玉塵)」という例を挙げ、観念的には漢音B(ベイ)でなければならないが、所謂読み癖の類で、M(メイ)の方を出したと主張し、これを読み癖と呼んでいる。

高松(1971)は、漢籍読書音において、その当時の原則に合わないものを読み癖と呼んでいるが、その読み癖の内容や性格については具体的に述べていない。

また、遠藤邦基(2002)は、中世から近世にかけて書かれた、日本古典の聞書類の中の、清濁、連濁、四つ仮名、開合、拗音などに関わる注釈を「読み癖」とし、その実態と内容を検討して、その史的な価値と位置づけを論じている。すなわち、例えば「つくは山、序ハカリニテ、ツクハノ『ハ』ノ字ヲ<sup>ハ</sup>清ヨム也。(天理本『古今和歌集聞書』仮名序)」のような、文脈や語義の解釈には関わっていない清濁関係の注記を一括して「読み癖」と呼び、現代における清濁のとらえ方に立ってその由来や性格などを考察している。遠藤は、注釈の意図や内容などの考察という点においては、本論文とあい通じる所を持っている。しかし、漢籍抄物を取り上げている点、室町期抄物における「ヨミクセ」「ヨミツケ」等が、その当時の学問においてどのような読み方を指していたのか、またどのような性格を持っていたのかを検討しようとしている点などにおいては、本論文と異なっている。

以上、先行研究は、読み癖を雑多な意味内容を持つものとしてとらえているだけで、具体的に、それぞれどのようなものなのか、すなわち室町期における読み癖というものがどのような性格を持っているのかは十分論じられていない。

### 3. 「ヨミクセ」「ヨミツケ」等の使用小史

本節では、「ヨミクセ」「ヨミツケ」等の使用の歴史について若干述べておきたい。奈良期以降、室町期までの物語や説話、狂言また謡曲など、日本古典 30 点<sup>3</sup>には、「ヨミクセ」

---

<sup>3</sup>抄物以外の調査資料(出版年, 出版社, 所蔵者等は省略)①和文 20 点: 宮島達夫『古典対照語い表』(万葉集 竹取物語 伊勢物語 枕草子 源氏物語 紫式部日記 土左日記 かげろふ日記 更級日記 大鏡) / 西下経一, 滝沢貞夫共編『古今集総索引』 / 青木伶子『広本・略本方丈記総索引』 / 東節夫他『和泉式部日記総索引』 / 塚原鉄雄他『大和物語語彙索引』 / 片桐洋一他校注・訳『平中物語』 / 宇津保物語研究会『宇津保物語本文と索引』 / 鈴木弘道『とりかへばや物語総索引』 / 柳原邦彦他『古活字本狭衣物語総索引』 / 松尾聡他『落窪物語総索引』 / 森口年光『堤中納言物語総索引』 ②和漢混淆文 6 点: 馬淵和夫他『今昔物語集自立語索引』 / 増田繁夫他『宇治拾遺物語総索引』 / 泉基博『十訓抄本文と索引』 / 坂詰力治他『保元物語総索引』 / 近藤政美他『平家物語索引』 / 西端幸雄他『土井本太平記本文及び語彙索引』 ③狂言 3 点: 内山弘『天正狂言本』 / 北原保雄他『大蔵虎明本狂言集総索引』 / 北原保雄・大倉浩『狂言記の研究』 ④謡曲 1 点: 新潮日本古典集成『謡曲集』 ⑤聞書類 37 点: 東京大学国語研究室編『古今和歌集聞書』 / 京都大学国語国文 資料叢書『伊勢物語聞書』 / 百人一首注釈書叢刊『百人一首師説抄』『龍吟明訣抄』『百人一首倉山抄』『百人一首切臨抄』『百人一首諺解』『百人一首師伝秘抄』 / 京都大学文学部国語学国文学研究室編『新古典文庫古今集聞書』 / 日本古典文学刊行会『無名抄』 / 京都大学文学部国語学国文学研究室編『源氏清濁』 / 京都大学文学部国語学国文学研究室編『古今集抄』 / 牧野文庫本『新古今集聞書』 / 九州大学出版会『幽斎本新古今集聞書』 / 日本思想大系 23 (教訓抄 洛陽田楽記 作庭記 入木抄 古来風躰抄 無名草子 老のくりごと 君台観左右帳記 殊光心の文 専応口伝 ひとりごと 禅鳳雑談 八帖花伝書 わらんべ草 等伯画説) / 日本古典文学大系 65 (新撰随脳 和歌九品 近代秀歌 詠歌大概 毎月抄 後鳥羽院御口伝 為兼卿和歌抄 正徹物語)⑥

「ヨミツケ」等の一つとして見出されない。

ところが、室町期の歌学の注釈書や聞書類37点には、「ヨミクセ」6例が見られる<sup>4</sup>。

- 仁和のみかと 仁和ノ「和」ノ字,「ワ」ナラン「ナ」ナラント読也,是ヨミクセ也,  
(東大本『古今和歌集聞書』・卷一 21)
- 百人一首「ヒヤクニンシュ」とよむ也。一字けしてよむ也。よみくせとかく耳にた  
たぬをよしとす口伝 (中院本(通勝)百人一首抄)

つまり、室町期の伝授関連の聞書資料の場合、管見の限りでは、「ヨミクセ」の用例はあったが、「ヨミツケ」「名目ツカイ」「ヲシツケ(ヨミ)」は、一つも見いだせなかった。なお、能楽集22点にも見られなかった。

さらに、室町期の古辞書にも、その語義の説明こそ加えられていないものの、次のように「ヨミクセ」「ヨミツケ」等が見出される。

---

能楽集 22点：日本思想大系 24 (風姿花伝 花習内抜書 音曲口伝 至花道 花鏡 二曲三体 人形図 三道 曲付次第 風曲集 遊楽習道風見 五位 九位 六義 五音曲条々 拾玉得花 五音 習道書 夢跡一紙 却来華 金島書 世子六十以後申楽談儀 金春大夫宛書状)⑦古辞書 10点=編著者を記さない場合は中田祝夫編「古辞書大系」に収められたもの。『色葉字類抄研究並びに総合索引』/築島裕解説『図書寮本類聚名義抄』/正宗敦夫編纂校訂『類聚名義抄(観智院本)』/『字鏡集白河本寛元本研究並びに総合索引』/『文明本節用集研究並びに索引』/『中世古辞書四種研究並びに総合索引』:頓要集・撮壤集・温故知新書・運歩色葉集/『古本節用集六種研究並びに総合索引』⑧キリシタン資料 4点：金田弘『天草本金句集本文及び索引』/江口正弘『天草版平家物語対照本文及び総索引』/京都大学文学部国語学国文学研究室『文禄二年耶蘇會板伊曾保物語』/小島幸枝編『耶蘇會板落葉集』

<sup>4</sup>今回調査した日本古典の注釈書や聞書類には、「ヨミクセ」だけが6例見出された。

『色波字類抄』<sup>ゴウリキウテン・コウラククー</sup>後涼殿<sup>私云源氏物語ヨミクセ也</sup> (黒川本下2㉔)

『下学集』<sup>ツク</sup>定一朝<sup>ツク</sup>定読曲<sup>ヨミクセ</sup>ゾウト云。(前田家本23・3)

『文明本節用集』<sup>ヨミクセ</sup>読癖(319・7)<sup>ヨミクセ</sup>読著付(319・7)

一方、室町期のキリシタン資料『落葉集』には「名目」(p94)が挙げられている。また、『邦訳日葡辞書』(408r)にも「名目 Miōmocu ミヤウモク それぞれの学問の術語、すなわち、技芸と学問とで使われる一定の用語。」(土井忠生他訳『邦訳日葡辞書』)と、語釈付きで挙げられている。

しかし、「ヲシツケ(ヨミ)」は、室町期の抄物以外の資料には一つとして見られない。

以上、「ヨミクセ」「ヨミツケ」等は、室町期以前までは読み方に関わってあまり用いられることがなかったこと、また室町期では、抄物や歌学の聞書類で用いられていることなどから、歌学も合わせて学問の場において比較的良好に用いられていた語でなかったかと推測される。なお、歌学の聞書類における「ヨミクセ」等については別稿にゆだねたい。

#### 4. 抄物における「ヨミクセ」「ヨミツケ」等の分布

漢籍を原典とする抄物のほとんどは五山系もしくは博士系に属する。原典の内容や、これまでの抄物の研究などから、漢字音に関わる記事が比較的多いのではないかと判断される両系の漢籍の抄物29点<sup>5</sup>を取り上げ、それらにおける「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」

---

<sup>5</sup>今回調査した抄物29点の中で、「ヨミクセ」「ヨミツケ」などの用例が見出せなかったもの、つまり【表1】揭示以外の抄物は次の10点である。

五山系4点：『江湖風月集抄』芳郷光隣(1513)、『三体詩幻雲抄』月舟寿桂(1527)、『三体詩素隠抄』説心素隠(1622)、『湯山聯句抄』一韓智翹(1504)

博士系6点：『長恨歌抄』清原宣賢(1543)、『琵琶行』清原宣賢(1543)、『中庸抄』清

などの有無を調べてみた。その結果、以下の19点にその例が見いだされる。五山系、博士系に分けてみると、【表1】のようになる。

【表1】 分布・用例数

資料		読み癖	ヨミクセ	ヨミツケ(ヨミ)	ヲシツケ(ヨミ)	名目(ツカイ)	計	
五山系	①百丈清規抄・東帰光松 1386~1462・1冊		0	1	0	0	1	
	②杜詩統翠抄・江西龍派・1439・19冊		0	1	0	0	1	
	③漢書列伝竺桃抄・竺雲等連・1458・1冊		0	9	0	0	9	
	④漢書列伝綿景抄・綿谷周麿・1468・1冊		0	1	0	0	1	
	⑤史記抄・桃源瑞仙・1477・20冊		7	11	1(1)	0	19(1)	
	⑥周易抄・柏舟宗趙・1477・6冊		1(1)	2	0	0	3(1)	
	⑦漢書景徐抄・景徐抄・1477~1496・3冊		1	0	0	0	1	
	⑧漢書列伝景徐抄・景徐抄・1480・1冊		4	1	0	0	5	
	⑨古文真宝桂林抄・笑雲清三・1482・2冊		0	1	0	0	1	
	⑩山谷詩抄・一韓智翹・1508以前・6冊		0	1(1)	0	0	1(1)	
	⑪四河入海・笑雲清三・1534・100冊		0	6	0	0	6	
	⑫中興禅林風月集抄・惟高妙安・1540以後・1冊		0	2	0	1	3	
	⑬詩学大成抄・惟高妙安・1561・10冊		0	9	2	1	12	
	⑭玉塵抄・惟高妙安・1563・65冊		4(3)	13	6	4	27(3)	
	計			17(4)	58(1)	9(1)	6	90(6)

原宣賢(1632), 『大学抄』清原宣賢(1649), 『古文孝経』清原宣賢(1669),  
『論語聞書』清原業忠(1467)

なお、博士系で用例が見られた抄物は、清原宣賢のものばかりであった。もともと博士系の抄物は清原宣賢のものがほとんどであることや、清原宣賢は当時博士系の中心人物であったことなどから、清原宣賢のものだけでも、博士系の抄物における読み癖のおおよそは把握できると考えられる。

博士系	⑮ 論語私抄・清原宣賢・1475 以前・5 冊	0	1(1)	0	0	1(1)
	⑯ 蒙求聴塵・清原宣賢・1523・2 冊	0	2	0	0	2
	⑰ 蒙求抄・清原宣賢・1529・7 冊	0	12(1)	0	0	12(1)
	⑱ 莊子抄・清原宣賢・1530・5 冊	0	1	0	0	1
	⑲ 毛詩抄・清原宣賢・1535・20 冊	0	6(3)	0	1	7(3)
	計	0	22(5)	0	1	23(5)

\*五山系と博士系両方合わせて 113 例。「ヨミクセ」と「ヨミツケ(ヨミ)」の中には、漢字音に関わるもののほか、訓すなわち「訓読み」「読み下しの順序」に関わるものが 11 例ある。その数は( )に掲げた。

本章は前述のように漢字音に焦点を絞っていくが、【表 1】から次のような事実が明らかになる。(なお、訓についての「ヨミクセ」等に関しては、注(9)注(15)参照。)

- a. 全体として、読み癖に関わる語句が現れている抄物は五山系に圧倒的に多い。博士系では、『蒙求抄』『毛詩抄』以外のものには、ほとんど出てこない。
- b. 「ヨミクセ・クセ」「ヲシツケ(ヨミ)」は五山系にしか現れていない。また「ヨミクセ」は『玉塵抄』『漢書抄』『史記抄』『周易抄』のみに、「ヲシツケ(ヨミ)」は、『玉塵抄』『詩学大成抄』『史記抄』のみに現われている。
- c. 「ヨミツケ」は五山系と博士系両方に広く現れている。
- d. 「名目(ツカイ)」は、両系に現れているが、五山系に 6 例あるのに対して、博士系には 1 例しか現れていない。

このような事実は、次のようなことを示唆しているように思われる。

1. 漢字音の読み癖については五山ではよく議論されたが、博士家では必ずしも活発に論じられることはなかった。
2. 「ヨミクセ・クセ」「ヲシツケ(ヨミ)」は五山内でよく用いられていた。また、「ヨミクセ」「ヲシツケ(ヨミ)」などは、それぞれ特定の学派・宗派あるいは漢籍において



用いられる傾向にあった。

なお、「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」等の指し示す内容に関わる b については、以下における読み癖そのものの考察の結果を踏まえて改めて検討することにしたい。

## 5. 読み癖の内容

前節での調査に基づいて、本節では、「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目(ツカイ)」が、どのような漢字のどのような字音に関わる読み方について用いられているのか、またそれはなぜかを、それぞれ具体例によりながら検討してみたい。

なお、その際には読み癖の例数をもっとも多く持ち、また「ヨミクセ」以下四つの名称すべてが現れている『玉塵抄』を中心としていくことにする。

### 5.1 ヨミクセ・クセ

『玉塵抄』と『漢書抄』には、「ヨミクセ(クセも含む。以下同じ)」という語を用いた、次のような講述がある。

- (5) 遊説ノ士ナリ、説諸国ヲアルイテロヲタイテ兵軍ノコトヲ云イ奥モノコトヲトイタソ、説ハゼイトヨムソ、トク心デハアルマイ、セツトハ史漢ノヨミクセテヨマヌソ、  
遊説ノ士ナリ、 (玉塵抄・8巻 p.360)
- (6) 元父 史ニ亢音剛父音甫トシタソ、史漢書テハ太半フ音ヲホトヨミ、ホ音ヲハフトヨムソ、説クセト云ハ此様ナコトソ、 (漢書列伝景徐抄・三 16オ)

(5) 「説」は、『文明本節用集』では、「セツ」(1092・5)「エツ」(395・2) (朱筆のかなはカタカナで、墨筆のものはひらがなで示す。以下同じ。なお、この書では朱筆は漢音唐音を、墨筆は呉音と訓

を表わしている),『倭玉篇』でも「セツ」(140・4),『下学集』でも「セツ」(139・5)となっており,『邦訳日葡辞書』(756)でも「セツ」の音しか挙げられていない。

このような事実を踏まえると,(5)は,「説」の室町期当時における一般的な読み方は「セツ」であるが,史漢などでは「ゼイ」という特別な読み方がとられていたことを示しているのではないかと推察される。

また,(6)では「父」について,『史漢』の「ヨミクセ」では「フ」音は,「ホ」に,「ホ」

---

6 この「説」については,『玉塵抄』の別のところでも「史漢ノ書」での読み方が示されている。

①口ヲタイテサキヲカラストモ云テアルキマワル者ヲ遊説ト云ソ,説ハセツトハヨマヌソ,ゼイトヨムソ,ゼイノ音ヲ付タソ,史漢ノ書テサウヨムソ,(玉塵抄・5巻 p.59)

②漢ノ列向ガ説苑アリ,説トヨメルソ,セツハヨマヌソ,遊説説客ナトモゼイトヨムソ,(玉4巻 p.218)

この例でも「説」は,「史漢ノ書」では「ゼイ」と読んでいることを述べている。

なお,この「説」は,『広韻』では「舒芮反,先藝反,失藝反」で「ゼイ」の音,「悦稅反」で「エツ」「始銳反」で「セツ」の三つの音となっている。また,『邦訳日葡辞書』や『文明本節用集』では,「セツ」の音しか挙げられていない。

このような点から,「説」は中国の原音で複数音があり,その当時一般的な読み方としては「セツ」が用いられ,史漢などでは「ゼイ」という特別な読み方をとっていることがわかる。「説」は,『広韻』では「舒芮切(祭)去」「失蕪切(薛)入」「弋雪切(薛)入」である。『韻鏡』では「舒」も「失」も歯音清音字,「弋」は喉音清濁音字なので,その日本漢字音としては「ゼイ」,「セツ」,「エツ」が期待される。しかし,室町期当時における日本での一般的な読み方は,『広韻』で言えば「失蕪切」「弋雪切」に対応する「セツ」「エツ」しかない。

音は「フ」になること<sup>7</sup>が示されている。なお、「父」の場合は、『文明本節用集』では、「フウ」(71・8)(197・3)、「フ」(210・8)と、『倭玉篇』では、「ブ」(47・7)、『下学集』では、「フ」(教 30・1)、また『邦訳日葡辞書』(268r)では「フ」(父母(Fubo))となっている。当時における一般的な字音は「フ」「フウ」であったが、『史記』『漢書』では特別に「ホ」と読まれていたと考えられる。

この「ヨミクセ」については、(5)(6)にあい通じる次のような講述がある。

(7)音ニ当ストヨムソ、漢書ノヨミクセソ、…史記モ漢書モ漢書ハ史記ニカワツタヨミヤ  
ウアルソ、史漢ハ学セ<sup>8</sup>イ文字ノカハカリテ<sup>8</sup>ヨンデハヲカシイコト多ソ、

(玉塵抄・6 卷 p.677)

(8)今史記家ト漢書家トノ読クセヲ見ルニ、史記家ノ点ハ猶モ念比ニクワシイ読クセガア  
ルソ、漢書家ハ尋常ナル文字読カマダ多ソ、

(史記抄・五 5 ウ)

(9)史漢ノ文字ノ増損カ不一ソ、増タカワルイテモナク損シタカヨイテモナイソ、読クセ  
ハ史記カネンコロテヨイ事ガ多ソ、

(漢書列伝景徐抄・三 12 ウ)

(7)~(9)から、『史記』『漢書』には、特定の漢字について一般的な読み方とは異なった慣例的な読み方があったこと、そして、その慣例的な読み方が「ヨミクセ」と呼ばれてい

<sup>7</sup> 「父」は『広韻』では「方矩切(廢)上」「扶雨切(廢)上」で、日本漢字音としては「フ」音が期待される。

<sup>8</sup> 国会図書館本『玉塵抄』の「学セイ」では意が通じない。叡山文庫本では「史漢ハ学セイデ(三一 8 オ)」となっているので、「学セイ」は「学セイデ」の誤写と見られる。また、国会図書館本『玉塵抄』には、「カハカリテヨンデハ」とあるが、これでは意が通じない。叡山文庫本では「カハリテ(三一 8 オ)」となっているが、これもまた誤写があるのであろうか、意味が通じない。この問題は今後の課題としておきたい。

たことがわかる。また、(7)の「カワツタヨミヤウ」「学セイ(デ)」などといった語句から、「ヨミクセ」はそれぞれの漢字について特別に学ばなければならないものだったことが知られる。さらに、(8)(9)から、『史記』『漢書』といった歴史書の読みでは、「尋常ナル文字読」などとは異なった、必ずしも一般的ではない「ヨミクセ」というものがあったこと、またその「ヨミクセ」については『漢書』に対するよりは『史記』に対する時の方が細かいところまで問題にされたことなどがわかる。

一方、漢字音に関する「ヨミクセ」がどのような系統の字音と結びついているのかは、『史記抄』における次のような講述が参考になる。

(10) 史漢ノ読クセハトコヲモ漢音ニ可読也、吳音ニハヨムマイソ、

(漢書列伝景徐抄・三5オ)

以上、漢字音について「ヨミクセ」は、『史記』『漢書』の読み方について用いられるものであり、そしてその音は当時における漢音であったことが知られる。

これに関連して、『漢書』『史記』における漢字の字音の特別な読み方について、次のような講述がある。

(12) 準ハハナノコトソ、準ハシユントハツネノ音ソ、セツ音ヲメツラシウ付タソ、史漢

テハメツラシイ音ヲヲホユルト、景徐漢書ノ講ニアツタソ、(玉塵抄・8巻 p.470)

(13) 準ハ漢ノ高祖ナリ、隆一ハハナダカナト云心ソ、隆ハタカシトヨムソ、準ハハナナ

リ、準ハセツト漢書デハヨムナリ、ジユントモヨムソ、景徐ノ漢書ノ談義ニ史記漢書ハアタラシイ音ヲ付テヨムモノソ、本々ノ音ハランデモナイソ、準ハ鼻ナリ、

(詩学大成抄・上巻 p.431)

(14) サルホドニ今時ニコトコトク李陽<sup>キヨウ</sup>氷景徐ハ陽氷ト本字ノ音ニヨマシマシタソ、史

漢ノ書ニ別ナ音ヲツケタヲハメツラシイ音ヲヲホユルソ、近代ノ書ニ異ナ音アタラ

シイ音ヲ付タヲ必サノミケツコウガヲニヨマゾトモトラシナリタソ、桃源月翁ナド  
モ此心ニヲシナリタソ、 (詩学大成抄・下巻 p.416)

これらの抄文の中には「ヨミクセ」という語はない。しかし、これらは、史漢の書では「メツラシイ音」「アタラシイ音」「別ナ音」を付けるということ、つまり、しばしばその当時の一般的な読み方とは異なる特別な読み方が取られていたことを示している。

以上、「ヨミクセ・クセ」については、主に五山系で用いられた、『史記』『漢書』という歴史書における慣例的な特別な読み方であること、そして、系統的には漢音に属し、読書音において、時にはその当時の一般的な読み方と対立するものだったことが明らかになった。なお、『史記』『漢書』についてだけ「ヨミクセ」が現れていることから、当時五山の読書音においては、『史記』『漢書』については一部特別な読み方が取られていたことが知られる<sup>9)</sup>。

## 5.2 ヨミツケ

---

<sup>9)</sup>漢字音の「ヨミクセ」の考察を踏まえて、訓にも関わる「ヨミクセ」を検討してみたい。

①当ノ字ヲヨマヌソ、音ニヨムソ、此ヤウナコト史漢ニクセ多ソ、不学ナレハムサト  
ヨムソ、 (玉塵抄・3巻 p.107)

②刑當ハ刑<sup>フツル</sup>當トハヨマヌソ、音ニ當ストヨムソ、漢書ノヨミクセソ、知ラヌ人ハ<sup>フツル</sup>當ト  
ヨマルルソ、 (玉塵抄・6巻 p.677)

「史漢」「漢書」、また「不学ナレハムサト」や「知ラヌ人ハ」などといった語句から、訓や訓読に関わる「ヨミクセ」も、漢字音における「ヨミクセ」と同様のものと解釈される。

「ヨミツケ(ヨミ)(以下「ヨミツケ」と呼ぶ)<sup>10</sup>は、【表1】の19書中18書の抄物に現れている。これは、当時それが広く用いられていたことを示している。

このような特色を持つ「ヨミツケ」は、具体的にどのような漢字のどのような読み方に関わっていたのだろうか。用例を分類してみると次のようになる。

<sup>10</sup>「ヨミツケ」には名詞的用法の「ヨミツケ」と動詞的用法の「ヨミツケ(タ・ル・テ)」がある。その用例数を分けて示すと【付表1】となる。

【付表1】「ヨミツケ」にかかわる名詞的用法と動詞的用法の分布

資料	ヨミツケ	動詞			計
		名詞	テ	ル	
五山系	8	17	5	28	58
博士系	1	4	3	14	22
計	9	21	8	42	80

- ① 名詞的用法: 揣摩, スイノ音ハナシ, シノ音也, アレドモ読ツケ也,  
(四河入海・二一ノ三17ウ)
- ② 動詞的用法テ: 洗馬トモヨマウ歟洗馬トヨミツケテヨムソ, (史記抄・十四80ウ)
- ③ 動詞的用法ル: 濟トヨムヘキ歟ソナントシタヤラ濟トヨミツクルソ,  
(四河入海・四十四ノ三1オ)
- ④ 動詞的用法タ: 成都セイトヨマウスカジャウト呉音ニヨミツケタソ,  
(玉塵抄・9卷p.86)

「ヨミツケ」は、全体的に名詞的用法の「ヨミツケ」よりは、動詞的用法の「テ」「タ」系で現れる場合の方が多い。しかし、それぞれの間に意味上特に際だった違いは認められない。このことから、「ヨミツケ」と「ヨミツケ(タ・ル・テ)」とは同等のものとして扱うことにする。また、「ヲシツケ(ヨミ)」は、動詞用法の「テ」が1例あるのみで、あとは全部名詞的用法で現れている。これらは、一つの漢字音をめぐって複数の読み方を示している点において共通しているので、すべて同等のものとして取り扱うことにする。

①連濁による特別な読み方(五山系2, 博士系3)

『玉塵抄』には、「ヨミツケ(ヨミ)」について次のような講述がある。

- (15) 解順ト云タソ、匡衡ノ時ヲスンテヨム人モアルソ、詩文ノヨミヤウノ法ハコトコト  
スムソ、サレドモマタヨミツケアリ、上ノ字ガハヌレハ下ノ字ヲニコラスルソ、此  
ハ教家ニウムノ下ハ必ニコルトイワルルソ、サレトモカナニシモニウノ点アリ、ム  
ノ点アルニ又ニゴラヌモ多ソ、コマカニヨウカンバンセヌ人ハシラヌソ、此ノツレ  
ヲ真乗ニ多ウタツネタソ、  
(玉塵抄・5巻p.298)

(15)は、当時漢字の読み方において「詩文」と対立していた「教家」の、「ウムノ下ハ必ニコル」という連濁についての規則にのっとりた読み方を、「ヨミツケ」としている。

連濁による濁音化について「ヨミツケ(ヨミ)」が現れている例は、博士系の『蒙求聴塵』にもある。

- (16) 九江王 江ノ字モトヨリ濁テヨミ付ル也、  
(蒙求聴塵・下84ウ)

- (17) 臨江 江濁テヨミ付タリ、  
(蒙求聴塵・中100ウ)

(16)(17)には、「教家ニウムノ下ハ必ニコル」といった語句はないけれども、中古音で「九」はu韻尾、「臨」はm韻尾であること、すなわち、一ウ、一ム(ン)の形の日本漢字音を持ってもおかしくないこと、「江」は『韻鏡』清音字であること、また、次のような講述もあることなどから、ここの「ヨミ付」も連濁により濁音化した漢字音のことを言うものだったと考えられる。

ちなみに、『詩学大成抄』には、「江」字に関わる連濁の説明が見られる。

- (18) 江州ト江ヲスムソ、九江ハ江ヲニゴルソ、九トウエニ、ウノヲクリガナルホドニ

ソ教家ノサダメハ, ウムノ下ハ字ノコエ本ノ字スタ音ナレドモニコルソ,

(詩学大成抄・上巻 p.274)

これは、「ヨミツケ」は、「詩文」における一般的な漢字音の読み方とは異なること、しかし、連濁は、当時の読書音において五山系と博士系両方に定着していたことを示している。

②漢音以外の字音を用いる特別な読み方 (五山系 9)

五山系の『玉塵抄』『詩学大成抄』では、次のように「書名」「人名」「所名」「年号」などにおける特別な読み方を言う語として「ヨミツケ」が現れている。字音の系統から見ると、三つのタイプがある。

i. 吳音を用いる特別な読み方。(五山系 5)

(19) 大同ト云ソ, 梁ノ武帝ノ年号ニ大同ト云アリ, ソレハ吳音ニダイドウトレモニゴツテ, ヨミツケタソ, (玉塵抄・1巻.60)

(20) 趙史一ハキカヌ史ソ, 趙宋ノ史記ノ干要ヲアツメタホトニ會要ト云ソ, 會一トヨマウスコトソ, 會一トヨミツケタソ, 書史會要ト云書アリ, 書法ノコトヲシタ書ナリ, マレナ書ソ, 日本ノイロハノコトナトシタソ, 此モ會要トヨムソ, 天隱ハ韻會ヲ會ト御ヨミアツタソ, 會要トヨマウスカ本ソ, 日本ニハヌタテ吳漢トリマゼテヨムソ, 蕩桶文章ノツレソ, (玉塵抄・7巻 p.324)

(21) 成都セイトヨマウスカ, ジャウト吳音ニヨミツケタソ, (玉塵抄・9巻 p.86)

(22) 淮南子トモ淮——トモヨマウト, 桃源天隱ハヲシナリタト聞タソ, サレトモ淮——トヨミツケタソ, 漢書テハ淮南王ト云コトアリ, 淮トハヨマヌソ, 又ハ淮トヨメル



人モアルソ、

(詩学大成抄・下巻 p.282)

(19)は、「大同」の場合、漢籍では普通「タイトウ」と清音に読んでいたが、年号の場合は特に「ダイドウ」と、両方呉音の濁音に読んでいたことを示している。(20)は、「會」の場合も、その当時の漢籍の一般的な読み方では、漢音の「クワイ」であったが、「會要」など書名の場合は呉音「エ」で「ヨミツケ」ていたことを、(21)は、「成」の場合、漢籍の一般的な読み方は漢音の「セイ」であるが、「成都」のような地名の場合は、呉音の「ジヤウ」に「ヨミツケ」ていたことを、また、(22)は、同じく「淮」も、漢籍では「クワイ」か「ワイ」で読んでいたが、「淮南子」のような書名の場合は、呉音の「エ」で「ヨミツケ」る人もいたことをそれぞれ示している<sup>11)</sup>。

これらの漢字における「ヨミツケ」は、一般の読書音とは対立している読み方、つまり「書名」「人名」「所名」「年号」などにおける特別な読み方を指しており、そしてその具体的な音は当時における呉音であるという点で共通している。

## ii. 唐音を用いた特別な読み方(五山系 2)

<sup>11)</sup> 『玉塵抄』の別のところで、次のように呉音と漢音の伝来とその使用場所について述べている。これに関連し、詳しいことは、本論文第5章を参照されたい。

(1) 剂ハ漢音ニハセイトヨムソ、醫書ニ呉音ニナニモヨムソ、書ノ名モ人ノ名モ所ノ名モ年号モコトコトク呉音ソ、呉ノ国カラ早フ、醫書ガ渡タホトニソ、(玉塵抄・7巻 p.33)  
 なお、『文明本節用集』では、(19)「大同」の「大」は、漢音「タイ」(549・5)、呉音「だい」(1050・3)、(20)會は、漢音「クワイ」(538・5)、呉音「ゑ」(24・3)、(21)「成」は、漢音は「セイ」(1089・3)、呉音は「じやう」(953.1)となっている。

(23) 趙州ハ趙ノ州ナリ、録ニ諡和尚ヲ趙州ト唐音ニ云イツケタ<sup>12</sup>ソ、

(詩学大成抄・上巻 p.225)

(24) 何山唐音ニ何山ト讀ツクルソ、

(四河入海・二十三ノ一 22 ウ)

(23)は「趙州」の「趙」は、(19)～(22)と同様にその当時の漢籍の一般的な読み方は「テウ」であるが、「趙州」が人名を表わす場合、特別に唐音で「ゼウ」と「ヨミツケ」でいたことを示している。また、(24)は「何山」も地名を表わす場合、その「何」を特別に唐音で「ヲ」と「ヨミツケ」るとしている。(23)は「趙州」の「趙」は、『文明本節用集』では「テウ」(582・2)、『倭玉篇』『下学集』でもそれぞれ「テウ」(161・3)、「テウ」(教 44・2)となっていることから、その当時の漢籍の一般的な読み方では「テウ」、しかし、「趙州」の「趙」だけは、特別に唐音で「ゼウ」と「ヨミツケ」られていたことを示している。なお、『聚分韻略』でも、「趙」には唐音として「ゼウ」(39 オ 853b)が加えられている。また、(24)は「何山」も地名を表わす場合、その「何」を特別に唐音で「ヲ」と「ヨミツケ」るとしている。「何」は、『文明本節用集』では「カ」(446・7)、『倭玉篇』では「ガ」(33・2)となっているが、『聚分韻略』では唐音「ヲ」(45ウ 504a)が付されている。

<sup>12</sup> 『玉塵抄』『詩学大成抄』には、「イツケ(タ)」という言い方が見られる。

① 尔汝ハワレトナレトココラニ云ツレソ、ワレガソチカト互ニ心河コトハヲ随意ニツカウヨビヤウソ…尔汝ハジジヨトヨミサウナコトソ、ニニヨト云イ付タソ、

(玉塵抄・8巻 p. 11)

② 白虎ハ呉音ソ、ハツコトヨミサウナガ呉音ニ四神ヲヨムソ、ヨミツケナリ、日本ノコトニ何事モ云ニ昔カラ云付タコトハ大概呉音ソ、

(詩学大成抄・下巻 p.324)

この字音に関わる「イツケ」も、他の読み癖を言う名称と同じく、一般的な読み方に対する特別の読み方を言う語で、特に韻書などにも関わっておらず、また(b)のような例文から、「ヨミツケ」と同義あるいは類義と見なし、「ヨミツケ」と同じものとして取り扱う。

iii. 呉音と漢音を交じえる特別な読み方(五山系 2)

(25) 鶺鴒<sup>セキリョウ</sup>ハセキト漢音ニヨミサウナカ鶺鴒<sup>セキリョウ</sup>トヨミツケタソ, 軋鶺鴒<sup>セキリョウ</sup>トヨムソ, 鶺鴒<sup>セキリョウ</sup>トハヨマヌソ, モトカラヨミツケテ呉音漢音ニマジルカ多ソ, (詩学大成抄・下巻 p.320)

(25)「鶺鴒」は、「書名」「人名」などの固有名詞ではないが、当時読書音では特別に、「漢音+呉音」の形で「ヨミツケ」られていたことが知られる。

以上、五山系抄物に見られる「ヨミツケ」として、呉音や唐音が用いられたものがあつたこと、また、「漢音」で「ヨミツケ」という講述がないことから、当時における一般的な読書音は漢音であり、呉音や唐音で読むのは特別な読み方であつたことが分かる。

③その音の由来・根拠もない慣用的な読み方(五山系 17, 博士系 12)

これは、五山系と博士系両方にその用例が見られる。韻書などの根拠も示すことなく、また、呉音、漢音、唐音という分類とも関わりなく、ただ単にある漢字について読むべき字音を示しているだけの「ヨミツケ」である。これらは、次の五つに分かれる。

i. もともとない字音を根拠もなく用いた読み方(五山系 6, 博士系 4)

(26)或字ハ或<sup>ツツ</sup>ノ音ハサラニナイソ, 惑モコクノ音ソ, ナントシタヤラウ, カフヨミツケテ読ソ, 力無事ソ, 経ヤナントニ或<sup>ツツ</sup>ト読テハ, ナニヲ云ヤラウテアラウソ,

(漢書列伝竺桃抄・一 10 オ)

(27)統翠云揣摩, スイノ音ハナシ, シノ音也, アレドモ讀ツケ也,

(四河入海・二十一ノ三 17 ウ)

(28)枳ハシノ音ソ, キノ音ハナイト云フソ, ヨミ付テキトヨムト云フソ, (蒙求抄・五 5 オ)

(26)「或」「惑」は、『広韻』では「胡国切(徳)入」で日本漢字音としては「コク」音、(27)「揣」は「初委切(紙)上、丁果切(果)上」で「シ」「タ」音、(28)「枳」は「諸氏切(紙)上」で「シ」音が期待される。つまり、『広韻』にはそれぞれ「ワク」「スイ」「キ」に相応する反切がない。しかし、(26)「或」「惑」には、『文明本節用集』ではそれぞれ「ワク」(240・5)、「ワク」(240・5)、また『邦訳日葡辞書』(6761)でも「ワク」しか見出せない。『下学集』でも、「惑」は「ワク」(教 146・1)となっている。以上、(26)「或」「惑」は日本漢字音としては「コク」となるべきところ、当時は、特に根拠も由来もないまま、両方ともにただ単に「ワク」と「ヨミツケ」られていたことが知られる。(27)「揣」、(28)「枳」についても同様である<sup>13</sup>。

ii. 二つの読書音の内一つを用いた読み方(五山系 11, 博士系 8)

(29)滑読如字ト云時ハ滑<sup>クワツ</sup>ノ音テモアラウン、アレトモハヤ滑稽ト読ミツケタソ、

(史記抄・十六 37 オ)

(30)太子洗馬一洗<sup>セン</sup>馬トモヨマウスカ洗<sup>セン</sup>馬トヨミツケテヨムソ、百官志ニ音ヲハシ洗<sup>セン</sup>トツ

ケタカソ、馬ノスソヲアラウン、(漢書列伝竺桃抄・一 53 ウ)

(31)曾<sup>セン</sup>參ト驂馬ノ驂ノ心ヲ以ヨマウト云義カアレトモ、昔カラ參トヨミ付タソ、

(論語私抄・一 15 オ)

(29)「滑」は、当時読書音として、「クワツ」「コツ」両方を持っていたが、「滑稽」の場合、「コツ」と「ヨミツケ」られていたこと、(30)「洗」も、「セン」「セイ」を持つが、「洗馬」の場合「セン」と、(31)「參」は「サン」「シン」を持つが、「サン」と「ヨミツ

<sup>13</sup> なお、(26)「枳」には『文明本節用集』で「キ」(915・3)、『倭玉篇』で「シ、キ」(204・5)、(27)「揣」には『倭玉篇』で「シ」(91・3)が挙げられている。

ケ」られていたことを示している。なお、「滑」は、『広韻』では、「古忽切(没)入，戸骨切(没)入，戸八切(黠)入」で、「クワツ」「コツ」音，(30)「洗」は「先禮切(齊)上，蘇典切(銑)上」で「セイ」「セン」音，(31)「參」は、「楚簪切(浸)平，倉含切(浸)(覃)平，蘇甘(談)下，七紺切(勘)去」で「サン」「シン」音を持っていたと推定される。そして、実際、いずれも二つの字音を持っているとされているわけである。

iii. 長音を用いる読み方(五山系 2)

(32) 嵩山ト云ソ，嵩ノ字ハ大リヤクストカルウヨメソ，嵩陽ノ時ハナガウヒクゾ，嵩陽トハヨマヌソ，ナニニモ云イツケヨミツケアルモノソ，(詩学大成抄・上巻 p.529)

(33) 鳥テコソアラウスレ，鳥孫ト読ツケタソ，(史記抄・十六 3 ウ)

(32)「嵩」は、「嵩山」の場合「ス」と、「嵩陽」の場合長音「スウ」に読むべきことが、(33)「鳥」は、一般的な読み方では「ウ」と読むが、「鳥孫」の場合はそれを長音「ヲウ」と読むべきこと<sup>14</sup>が示されている。これは、当時の読書音において、慣例的に長音に読む「ヨミツケ」があったことを物語っている。

iv. 誤った読み方(五山系 2)

---

<sup>14</sup> この「鳥」は、『広韻』では、「哀都切(模)平」である。『玉塵抄』の別のところでは『広韻』と同じく「鳥 哀都ノ切」をあげ、「ヲノ音ナリ，(一七 74 ウ)」としている。つまり、『史記』では「ヨミツケ」として、この「ヲ」を特に「ヲウ」と読んでいたということになる。なお、「鳥」は、『文明本節用集』では「ウ」(484・1)，『倭玉篇』でも「ウ」(394・3)，『下学集』でも「ウ」(前 3・6，春 5・6)となっていることから、日本の当時の一般的な読み方は「ウ」であったと推定される。

- (34) 拓<sup>シヤ</sup>技<sup>キ</sup>曲<sup>キョク</sup>ト云カ音<sup>ネ</sup>曲<sup>キョク</sup>ヤ歌<sup>カ</sup>ニアルソ、此モ字ヲアヤマツテヨブソ、拓<sup>シヤ</sup>ノ字デハナイソ、  
拓<sup>シヤ</sup>ノ字ナリ、似タホトニ柘<sup>シヤ</sup>ノ字ニシテ、柘<sup>シヤ</sup>トヨミツケタソ、(詩学大成抄・下巻 p.456)

これは、当時、「拓」が「柘」の字と似ていることから、「拓」字を「柘」の字音である「シヤ」と「ヨミツケ」ていたことを示している。

v. 儒者からみた叢林独特の読み方(博士系 2)

五山系と博士系で「ヨミツケ」が異なっていることを述べている講述がある。

- (35) 史記ノ田横<sup>ワウ</sup>ヲワウトヨミ付<sup>ツケ</sup>タト云義アレトモイワレヌソ、 (毛詩抄・十一 13 オ)

- (36) 田横<sup>ワウ</sup>一漢書テハ列傳三田儋傳ノ末ニアルソ、田儋カ從第三田榮又ソノ第二田横<sup>ワウ</sup>ソ、横<sup>ワウ</sup>  
ト叢林ニ読付<sup>ツケ</sup>タト云ルルカクワウサウナソ、古ノ儒者ニアワヌホトニ知ヌソ、

(蒙求抄・一 27 オ)

- (37) 田横<sup>ワウ</sup>ヨムハ非也、何ニ音ヲ横<sup>ワウ</sup>トツクルソ、妙智ハ田横<sup>ワウ</sup>ト訓也、松鷗綿谷ハ横<sup>ワウ</sup>トヨ  
マレタソ、横<sup>ワウ</sup>ノ音モアルソ、 (漢書景徐抄・六 36 オ)

- (38) 田横<sup>ワウ</sup>ト云モカウヨムソ、田横<sup>ワウ</sup>ナントトヨムハラウキニワルイソ、

(漢書列伝景徐抄・三 29 オ)

『毛詩抄』『蒙求抄』は博士系である。したがって、(35)(36)は、『史記』の「田横」の「横」は叢林の「ヨミツケ」では「ワウ」だったこと、これに対して博士家においては「クワウ」だったことを述べている抄文と解釈される。「横」は、『文明本節用集』では、「ワウ」(239・4)、『下学集』では、「ワウ」(亀 63・5)となって、叢林の「ヨミツケ」に一致している。

なお、『倭玉篇』では、「クワウ」(203・4)となって、博士家の読み方と一致している。

一方、五山系の(37)(38)『漢書抄』は、叢林での読み方としては「クワウ」「クハウ」は正しくないと述べている。このことから、当時、ある漢字の読み方において叢林と博士家ではあい対立していることがあり、博士家の方は、叢林の方の読み方を「ヨミツケ」と言っていたことがうかがわれる。

以上、「ヨミツケ」は、五山系と博士系の両方で用いられた語であった。すなわち、特定の学派あるいは宗派・系統などと結びつくことなく、広く用いられていた語であった。そして、それが指すものは、多く、教家の連濁法によった読書音であったり、呉音や唐音、あるいはその由来のはっきりしない音など、漢籍の正統な読書音に対立するある特別な音であった。特に、時には叢林の特別な読書音であったりもした。これは、「ヨミツケ」が、学派、宗派、系統などに、特に関わらない言葉であったことを示している。言い換えると、「ヨミツケ」は、室町期当時、慣習的に用いていた読み方を言う名称として、もっとも一般的なものだったのではないかと考えられる<sup>15</sup>。

### 5.3 ヲシツケ(ヨミ)

「ヲシツケ(ヨミ)」は、『玉塵抄』『詩学大成抄』にしかその用例が見られない。

(39)自殺ハ自ハスンテヨムソ、殺ハサツトヨムソ、史記漢書ヲシラヌ人ハ、自見シテヲ

<sup>15</sup> なお、「ヨミクセ」と同様、訓や訓読に関わる「ヨミツケ」もある。

①至也トシタ程ニ至ルトヨミ付タマテソ、(毛詩抄・十二3ウ)

②四クマハ日本テヨミ付タ学ソ、(蒙求抄・一6オ)

この「ヨミクセ」は、由来・根拠を示すことなくただ単に慣用的に用いられている読み方を言っているだけのものであり、漢字音に関わる「ヨミクセ」と同様の用例と考えられる。

シツケヨミニ自殺トヨマルルソ、史漢ニ此のツレノヨミクセヨミヤウ多ソ、

(玉塵抄・3巻 p. 284)

(40)即墨ヲ即一トヨムワヲシツケヨミソ、史漢ノ書ヲ学ヌ人ハヲシツケテヨムソ、即トヨムソ、

(玉塵抄・10巻 p.111)

(39)は、「殺」の場合、『史記』『漢書』での読み方は「サツ」であるが、「ヲシツケ(ヨミ)」では「セツ」と読まれていたことを、また、(40)は、「即」の『史記』『漢書』における正しい読み方は「シヨク」であるが、それが「ソク」と「ヲシツケヨミ」される場合があったことをそれぞれ示している。なお、(39)「殺」の場合、『邦訳日葡辞書』にも「殺仏 Xetbut」(756l)「殺害 Xetgai」(756l)「殺盗 Xettö」(756r)などといった例がある。なお、『文明本節用集』でも「殺害セツガイ」(1095・2)、『倭玉篇』でも「セツ」(278・3)、『下学集』でも「殺害セツガイ」(春 41・1)となっている。このようなことは、その当時一般に「殺」は「セツ」と読まれていたことを示している。なお、(40)「即」は、『文明本節用集』にも「ソク」(387・4, 387・7 等)、『倭玉篇』でも「ソク」(247・4)、『下学集』でも「即位ソクキ」(教 63・1 春 71・3)、『邦訳日葡辞書』でも「即位 socu:i」(569l)「即滅 socumet」(569r)などと「ソク」になっていることから、その当時一般に「ソク」と読まれていたことが分かる。

(39)は、「殺」の場合、『史記』『漢書』での一般的な読み方、つまり正統な讀書音は「サツ」であるが、「ヲシツケヨミ」では「セツ」と読まれていたことを、また、(40)は、「即」の『史記』『漢書』における正しい読み方は「シヨク」であるが、それが「ソク」と「ヲシツケヨミ」される場合があったことをそれぞれ示している。

注目されるのは、「ヲシツケヨミ」について、(39)の場合は「史記漢書ヲシラヌ人ハ自見シテ」、(40)の場合は「史漢ノ書ヲ学ヌ人」という語句が現れていることである。これは、「ヲシツケ(ヨミ)」とは、『史記』『漢書』を正しく勉強しない人が、自分勝手に推量・臆断した漢字音の読み方であることを示している。つまり、5・1 で取りあげた『史記』『漢書』



における「ヨミクセ」と対立するものと考えられる。

(39)(40)に関しては、次の(41)のように、「学問セヌ人ノヲシツケヨミ」そして「自見(学)<sup>16</sup>」もある。

(41)此ハミチ人トヨメルソ、上ノ食客ミチ人ハ、史漢ノ書テハミチ人チノ字モスムソ、人ハシントヨムソ、物々ニヨミヤウアリ、スミニコリノ定リアリ、学問セヌ人ノヲシツケヨミハヤカテキコユルソ、  
(玉塵抄・7巻 p.593)

(42)二字ノ中ヲハ呉音ニヨミ、下ノ字ヲハ漢音ニ読ム類多ソ、物ノ本ノ名ニモ此ルイ多ソ、ソレヲ師傳セイテ、ヲシツケテヨメハヲカシイソ、自見ノ学ト云テ人ノワラウコトソ、  
(詩学大成抄・上巻 p.575)

(42)も、「師伝」によらない「自見」つまり自分勝手な読み方を「ヲシツケ(ヨミ)」としていることは、(39)(40)(41)と同様である。なお、(42)「自見ノ学ト云テ人ノワラウコトソ」から、「自見」による「ヲシツケヨミ」は嘲笑の対象となっていたと見られる。

以上、「ヲシツケヨミ」は『史記』『漢書』を正しく読めない人の、自分勝手の読み方を言う語であることが知られる。

一方、「ヲシツケ(ヨミ)」は、学問をしていない人の、排除の対象となる読み方ではなく、「叢林」での読み方を単に示していることもある。

(43)ヨミヤウノチガウコト叢林ト出家トニ多ソ、叢林ノハヲシツケヨミソ、経教ハ真乗ノガ本ソ、諸老モサウヲシナツタソ、ソレモドチエモヨムコト多ソ、

---

<sup>16</sup> 「自見」Iiqen とは、『邦訳日補辞書』によると、「Iiqengacumon 師匠なしに自分で読んで学習すること」(364r)とある。つまり、師から伝授された読み方ではなく、自分で勝手に作りあげた読み方のことである。

(玉塵抄・5巻 p.286)

(44)全ハ教家ニハステンテヨメルソ、全身ハセンヲスムソ、分ノ字モ分身モフンヲスムソ、

叢林ニハヲシツケヨミニ分身トニゴラルルソ、 (玉塵抄・8巻 p.288)

(45)永明ハエイメイトヨムヤラ、ヤウミヤウトヨムヤラ、ココラニハヲシ付ヨミニヤウ

メイトヨムソ、 (玉塵抄・10巻 p.54)

(43)(44)から、その当時「叢林」と「教家」は、ある漢字の音において対立していたことが、また(43)から「叢林」は「ヲシツケ(ヨミ)」をするが、「経教」では先学の「真乗」の読み方が優先されていたことが、(44)から、「分」は「教家」では清音に「叢林」では濁音に読まれていたことが分かる。これらのことは、先に述べたように、「ヲシツケヨミ」が自分勝手な読み方を意味していることとあいまって、「叢林」では、本来は「教家」で用いているものを用いるべきなのに、叢林独自の判断で独自の音を用いることがあったということ、そして、その音を用いた読み方を「ヲシツケ(ヨミ)」と言っていたことを示している。

ところで、(45)には「ココラ」が現れているが、「ココラ」は、『玉塵抄』の中では惟高妙安の住した相国寺及びそれを含む狭い範囲を指している<sup>17</sup>。もちろん、それは「叢林」の中に含まれる。したがって、(45)は、「叢林」の一部では、「永明」について「ヲシ付(ヨミ)」の「ヤウメイ」を使っていたことを示すものと解釈される。

これまで述べてきたことをまとめると次のようになる。

「ヲシツケ(ヨミ)」は、五山の惟高妙安の『玉塵抄』と『詩学大成抄』のみに用いられている語で、基本的には、『史記』『漢書』を勉強しない人が、自分勝手に推量・臆断した漢字音を指している。しかし、「教家」の正統な読み方と対立する五山「叢林」のある読み方を言う場合もある。なお、後者は、もとより、特にその根拠がある読み方でない

---

<sup>17</sup> 本論文第5章参照。

けれども、五山「叢林」では排除の対象とはなっていなかった。

#### 5.4 名目(ツカイ)

「名目ツカイ<sup>18</sup>」は、五山系では、惟高妙安の『玉塵抄』『詩学大成抄』『中興禅林風月集抄』だけに6例出ている。

(46)敗ハヤブルルナリ、…教ノ名目ニ敗ヲニゴツテモヨメルソ、真乗ハスンテヨメタソ、  
(玉塵抄・4巻 p.605)

(47)南都ノ法相宗<sup>ゾ</sup>ノ名目ニハ<sup>クセ</sup>辟支ト辟ヲニゴルソ、山三井寺ソ、スンテヨムソ、教ノ名  
且ニ南都ノハ山三井ニカワルコト多ソ、  
(玉塵抄・5巻 p.381~382)

(48)三請四止ト云ソ、三請ノ字ハ此カラ出タソ、三請ハ請ヲニコツテモヨムソ、名目ツカ  
イノ不得ナリ、真乗ハスンデヨメタソ、  
(詩学大成抄・下巻 p.109)

上の例は、いずれも清濁に関わる講述である。ここから当時は清濁がよく問題にされていたことがわかる。読みが問題となっている漢字は、すべて『韻鏡』清音・次清音字なので、その字音も普通には漢音・呉音の別を問わず清音が期待される。このことと、「名目ツカイ」という語には、(46)では「教」、(47)では「法相宗」「教」、また「南都」や「山三井寺」が「名目」に関わっていることなどから、次のようなことが知られる。

(46)~(48)は、「教」「経」内部における「名目」の読みとして「敗」や「辟」などの音

---

<sup>18</sup>「名目」と関連しては、洞院実熙の『名目抄』(1500)がある。『名目抄』における「名目」は正統な呼び方という意味においては抄物の「名目」と共通するが、『名目抄』は有職故実の「名目」を載せているもののためか、内容的に抄物における「名目」と関わる所はない。

は濁音になることもあることを述べるとともに、「名目(ツカイ)」とは、「経」「教」つまり南都の法相宗や北都の天台宗など、当時における「叢林」以外の仏教宗派における特別の読み方であることを示している。

ここで、注目されるのは、先に挙げた(4)や(49)(50)に見られるように、南都「真乗」の説は「叢林」すなわち禅林の説と相違するものが少なくないこと、言い換えれば、「叢林」に対する「教家」すなわち旧仏教の法相宗や天台宗などに一致するものが少なくないということである。しかも、(47)は、「名目」は、法相宗などの南都奈良旧仏教と、北都平安仏教である延暦寺や三井寺つまり天台宗とでは違う場合もあったことを示している。この、奈良仏教と平安仏教との違いについては、具体的な字音のことには必ずしも触れていないけれども、(49)～(52)のような講述がある。

(49)真乗ハ南都ニイテ教学アリ、…南都ノ名目ノツカイヤウ音ノヒキヤウモカワリタソ、

京ノ山寺両門ノ名目<sup>シツ</sup>ノヤウチカウコト多ソ、真乗ハ京デ談義ニ南都ノ花嚴宗法相宗西大ノ律部ノ談義ニ、南都ノヲ多ウツカワシムタソ、 (玉塵抄・4巻 p.329)

(50)南都ノ東大興福三井ノ名目ツカイヨミヤウノカワルコト多ソ、大ガイ真乗ニキイタソ、 (玉塵抄・5巻 p.286)

(51)敗<sup>ク</sup>ヲ濁テモ読ソ、此ヤウニチカエテ云ヲハ名目ノ不同ト云也、名目トハ、経教ニ付テ物ノ名ヲ云ニ、スミ、ニゴリ、呉音、漢音ノチカイナドノツレノ事ソ、此叡ノ山テモ谷々院々ニ名目ノチカイアルソ、 (中興禅林風月集抄・31ウ)

(49)(50)から「名目(ツカイ)」については、「花嚴宗」「法相宗」などの「南都」と、「三井寺」「山寺両門」つまり天台宗が漢字音において対立している場合が多いこと、そして「真乗」は「南都」の「名目」を優先していたことなどがわかる。

なお、(49)～(51)においては、具体的な字音が示されていないが、次に掲げる(52)「宗」の場合、『文明本節用集』では呉音「しゆ(931・2)」、漢音「シユウ(931・2)」、「ソウ 838・7」

となっているので、「シウ」「シユ」は「経教」関係特有の「名目(ツカイ)」であったことがよく分かる。

(52)宗ノ字ハ経教テハシユトヨミ、シウトヒイテモヨムソ、ソウトハヨマヌソ、…<sup>ソウシヤ</sup>宗  
トヨムハ名目ツカイノ不同ナリ、 (玉塵抄・1巻p.535)

一方、博士系の『毛詩抄』にも、「名目」についてあい通じることを述べているところがある。

(53)文ヲモントヨムガ公家ノ名目ソ、文官ト職原抄ナドデヨムソ、聞書を見タイト云ハ  
此ヤウナ事ソ、昔ノ人ハ名目ヲヨク云程ニソ、 (毛詩抄・四 28 ㊦)

『職原(私)抄』は有職故実書であることから、公家の有職故実などに関わっても「名目」のあったことが知られる。

以上、「名目(ツカイ)」は、『玉塵抄』など五山系の抄物においては、主に「名目(ツカイ)」という形で、読誦音に関わって旧仏教各宗派、特にその中の南都仏教と天台宗それぞれにおいて、また、場合によっては、南都の各宗派ごとに、また天台宗の各寺院ごとに決まっていた慣例的な読み方を指していること、ただし、博士系の『毛詩抄』においては、公家におけるある特定の読み方を言う語として用いられていることなどが明らかになった。

## 6. まとめ

これまで、室町期の学問の世界において、漢字音についてどのようなことがどのように論じられてきたのか、その解明の一環として、次のような考察を行ってきた。すなわち、『玉塵抄』を中心として、室町期抄物における「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」などの読み

癖がそれぞれどのような場で、どのような物事について用いられる読みだったのか、またそれはどのような性格のものかなどについて、読み癖と当時の読書音あるいは呉音・漢音との関わりなどを交えながら考えてみた。

読み癖のそれぞれの内容を名称ごとにまとめると、おおよそ次の【表2】ようになる。

【表2】抄物における読み癖

読み癖	1) 読み方の内容	2) 読書音 <sup>19</sup> との関わり	3) 用語使用範囲	4) 字音の系統
ヨミクセ・クセ	『史記』『漢書』での独特の読み方	読書音	五山系	漢音
ヨミツケ	①連濁による特別な読み方 ②漢音以外の字音を用いる特別な読み方 ③慣用的に用いられている読み方	読書音	五山系 博士系	非漢音 (呉音 唐音)
ヲシツケ (ヨミ)	①学問、特に『史記』『漢書』を勉強しない人の推量による読み方 ②叢林での特別な読み方	読書音	五山系	漢音
名目 (ツカイ)	①「経教」での決まった読み方 ②宗派における独自の慣例となっている読み方	読誦音	五山系 博士系	呉音

「ヨミクセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ(ヨミ)」「名目(ツカイ)」それぞれの関係をまとめると、次のようになる。

a. 「ヨミクセ」と「ヨミツケ」は、両方読書音に関わっている点では同じである。しか

<sup>19</sup> 室町期の学問の場においては、一つの漢字をめぐって、「本に向かって正式に読む時」の読書音と「経、仏典を読む時」の読誦音が対立していた。本論文第5章参照。「ヨミクセ」「ヨミツケ」は、もちろん漢籍を読む時の字音を問題としており、「ヲシツケ(ヨミ)」もまた叢林における特別な読み方で読書音に関わっている。これに対して「名目(ツカイ)」は、読誦音に関わるということになる。

し、「ヨミクセ」は『史記』『漢書』での特別な読み方で、その音は漢音である。これに対して、「ヨミツケ」は、①②③の用法を総合的に見ると、多く漢籍の一般的な読書音(漢音で清音で読むという基準)に反する音を言う。そして、それは主として呉音である。なお、唐音を含むという点を重視すると、「ヨミツケ」の音は非漢音と言うべきことになる。この点においては異なっている。

- b. 「ヲシツケ(ヨミ)」は、「ヨミクセ」と「ヨミツケ」を勉強していない人の読み方である。すなわち、「ヨミクセ・クセ」・「ヨミツケ」に対立するものである。
- c. 「ヲシツケ(ヨミ)」は叢林における特別な読書音を言う場合もある。一方、「名目(ツカイ)」は、読誦音に関わる、旧仏教各宗派の慣例的な読み方を言う。叢林対旧仏教という点において両者はあい対立している。

最後に3節末で述べた、各抄物における「ヨミクセ・クセ」「ヨミツケ」などの分布ないし現れ方の違いについて、4節以降の考察を踏まえて考えてみたい。

まず「ヨミクセ」「ヲシツケ(ヨミ)」の場合、五山系抄物しか現れていないことと、『史記』『漢書』における読み方についてにしか現れていないことから、五山における『史記』『漢書』の読書音についてのみ用いられるものだったのでないかと推定される。また、後者は限られた漢籍原典の特定の漢語の読み方にだけ関わっているとは見えないことから、五山系の読書音において広く用いられていた語だったのでないかと思われる。

一方、五山系博士系両方に現れている「ヨミツケ」は、このこと自体や、いろいろな漢籍の漢語や人名・地名などに関わっても現れていることから、叢林・博士家を問わず広く用いられていたものでないかと考えられる。すなわち、今日言う読癖の意に最も近いのはこの「ヨミツケ」でなかったかと思われる。

最後に、これもまた両方に現れている「名目」の場合、平安初期以前に成立した旧仏教か公家における漢字、漢語について使われていることから、旧仏教や公家その他、長い歴史を持つ世界に伝統的に伝わっていた読み方を言うものだったと考えられる。なお、五山系に6例、博士系に1例という現れ方は、五山系に現れている「名目」の例がすべて旧仏

教の漢語についてのものであること、五山はもともと仏教の一宗派であり、当然いろいろな点において旧仏教と深く結びついていたこと<sup>20</sup>などから、五山と旧仏教との間が漢語の読み方についても（少なくとも博士家より）密だった結果を反映しているのではないかと推定される。

---

<sup>20</sup> 当時漢籍には漢音、「経(教・経録)」には呉音が使われるとされていた(『日本大文典』土井忠生訳 1955, p.662)。これに従うと、読書音と関わっている「ヨミクセ」「ヨミツケ」「ヲシツケ」は漢音に、読誦音に関わっている「名目ツカイ」は呉音についてそれぞれ用いられる語であったということになる。しかし、実際には、「ヨミツケ」は、読書音ではあるが漢音でなく、慣例的に用いられる「呉音」「唐音」すなわち非漢音系の音を言う語だったわけである。なお、読誦音において五山は、一部仏典に唐音を用いていたが、一般には旧仏教と同じく呉音を用いていた。例えば湯沢(1986) p.2~5 参照。



【参考文献】

- 出雲朝子(1982)『玉塵抄を中心とした室町時代語の研究』桜楓社
- 遠藤邦基(2002)『読み癖注記の国語史研究』清文堂
- 来田隆(1971)「抄物に於ける『清』『濁』注記について」『国語学』84  
(2001)『抄物による室町時代語の研究』清文堂
- 高松政雄(1971)「漢音—文明本節用集の検討—」『岐阜大学研究報告(人文科学)』20
- 福島邦道(1962)「連声と読み癖」『国語学』52
- 松井利彦(1971)「近世漢学における漢字音の位相」『国語国文』40-5
- 柳田征司(1975)『詩学大成抄の国語学的研究研究編』清文堂  
(1998)『室町時代語資料としての抄物の研究』武蔵野書院
- 湯沢質幸(1986)『唐音の研究』勉誠社  
(1996)『日本漢字音史論考』勉誠社
- 李承英(2002a)「室町時代における呉音と漢音—『玉塵抄』を中心に—」『日本学報』53  
(2003a)「室町時代抄物における清音と濁音」『日本語と日本文学』37

【資料】

<抄物>

\*本文引用に使用したテキスト

- 大塚光信(1992)『続抄物資料集成』(全十巻)漢書抄(京都大学附属図書館本)・古文真宝桂林抄(京都大学附属図書館、叡山文庫本)・百丈清規抄(両足院本)・山谷抄(両足院本)・荘子抄(土井忠生本)・杜詩続翠抄(両足院本)清文堂  
(2000)『新抄物資料集成 中興禅林風月集抄』(京都府立総合資料館本)清文堂
- 岡見正雄・大塚光信(1971)『抄物資料集成』史記抄(内閣文庫本)・四河入海(宮内庁書綾部本)・毛詩抄(宮内庁書綾部本)・蒙求抄(宮内庁書綾部本)』清文堂
- 坂詰力治(1987)『論語抄の国語学的研究 影印編上下』(京都大学附属図書館清家文庫本)武蔵野書院

鈴木博(1972)『周易抄の国語学的研究 影印編上下』(土井忠生本)清文堂

中田祝夫(1970a)抄物大系別刊『玉塵抄』(国立国会図書館本)勉誠社

柳田征司(1975)『詩学大成抄の国語学的研究 影印編上下』(市立米沢図書館本)清文堂

京都大学電子図書館(2002)『蒙求聴塵』(京都大学附属図書館清家文庫本)

\*参照テキスト

大塚光信(2000)『新抄物資料集成 玉塵』(叡山文庫本)清文堂

岡見正雄博士還暦記念刊行会(1978)『長恨歌抄』『室町ごころ一中世文学資料集』角川書店

来田隆(2001)『湯山聯句抄本文と総索引』清文堂出版

清原宣賢(1649 写)『大學抄』筑波大学図書館

(1543)『琵琶行』筑波大学図書館

(1632 写)『中庸抄』筑波大学図書館

(1669 写)『古文孝経』筑波大学図書館

近代語学会編(1972)『近代語研究第三集』所収『論語聞書全』(国立国会図書館天文四)武蔵野書院

中田祝夫(1971)抄物大系『蒙求抄』(国立国会図書館本)勉誠社

(1972)抄物大系『毛詩抄』(東京教育大学附属図書館本)勉誠社

(1972)抄物大系『足利本論語抄』(足利学校遺跡図書館本)勉誠社

(1972)抄物大系『三体詩幻雲抄』(内閣文庫本)勉誠社

(1972)抄物大系『三体詩素隠抄』(国立国会図書館亀田文庫本)勉誠社

(1977)抄物大系『江湖風月集抄』駿河御謄本 逢左文庫本勉誠社

<抄物以外>

①和文

青木侂子(1965)『広本・略本方丈記総索引』武蔵野書院

宇津保物語研究会編(1982)『宇津保物語本文と索引』笠間書院

片桐洋一他(1972)『平中物語』(日本古典文学全集8)小学館

柳原邦彦他(1977)『古活字本狭衣物語総索引』笠間書院

鈴木弘道(1977)『とりかへばや物語総索引』笠間書院

塚原鉄雄他(1970)『大和物語語彙索引』笠間書院

西下経一・滝沢貞夫(1984)『古今集総索引』明治書院

東節夫他(1973)『和泉式部日記総索引』武蔵野書院

松尾聡他(1977)『落窪物語総索引』笠間書院

宮島達夫(1971)『古典対照語い表』(万葉集 竹取物語 伊勢物語 枕草子 源氏物語 紫式部  
日記 土左日記 かげろふ日記 更級日記 大鏡) 笠間書院

森口年光(1982)『堤中納言物語総索引』勉誠社

#### ②和漢混淆文

有賀嘉寿子編(1982)『今昔物語集自立語索引』笠間書院

泉基博(1982)『十訓抄本文と索引』笠間書院

近藤政美他(1999)『平家物語索引』勉誠出版

坂詰力治他(1981)『保元物語総索引』武蔵野書院

西端幸雄他(1997)『土井本太平記本文及び語彙索引』勉誠社

増田繁夫他(1987)『宇治拾遺物語総索引』清文堂

#### ③狂言

内山弘(1998)『天正狂言本』笠間書院

北原保雄他(1984)『大蔵虎明本狂言集総索引』武蔵野書院

北原保雄・大倉浩(1983)『狂言記の研究』勉誠社

#### ④謡曲

伊藤正義(1983-1988)『謡曲集』新潮社

#### ⑤聞書類

荒木尚著・高橋和彦(1987)『無名抄全解』双文社出版

片山享・近藤美奈子(1987)『新古今集聞書』古典文庫

京都大学国語国文資料叢書(1978)『伊勢物語聞書』臨川書店

京都大学文学部国語学国文学研究室(1980)『古今集抄』京都大学蔵 臨川書店

京都大学文学部国語学国文学研究室(1983)『源氏清濁』臨川書店

京都大学文学部国語学国文学研究室(1983)『古今切紙集』臨川書店

東京大学国語研究室(1985)『古今和歌集聞書』汲古書院

百人一首注釈書叢刊(1993)『百人一首師説抄』和泉書院

(1995)『百人一首倉山抄』和泉書院

(1995)『百人一首諺解』和泉書院

(1995)『百人一首師説秘伝』和泉書院

(1996)『龍吟明訣抄』和泉書院

(1999)『百人一首切臨抄』和泉書院

度会延明(1936)『古今訓点抄』古典保存会

#### ⑥能楽

表章・加藤周一(1961)『世阿弥禅竹』(日本思想大系 24)岩波書店

川瀬一馬(1943)『世阿弥自筆伝書集』わんや書店

中村格(1985)『世阿弥伝書用語索引』笠間書院

林屋辰三郎(1973)『古代中世芸術論』(日本思想大系 23)岩波書店

久松潜一・西尾寛(1961)『歌論集 能楽論集』(日本思想大系 65)岩波書店

#### ⑦キリシタン資料

江口正弘(1986)『天草版平家物語対照本文及び総索引』明治書院

金田弘(1969)『天草本金句集本文及び索引』白帝社

京都大学文学部国語学国文学研究室(1963)『文禄二年耶蘇會板伊曾保物語』臨川書店

小島幸枝編(1978)『耶蘇會板落葉集』笠間書院